舟底状木棺考
－丹後の刳抜式木棺－

石崎善久

1．はじめに

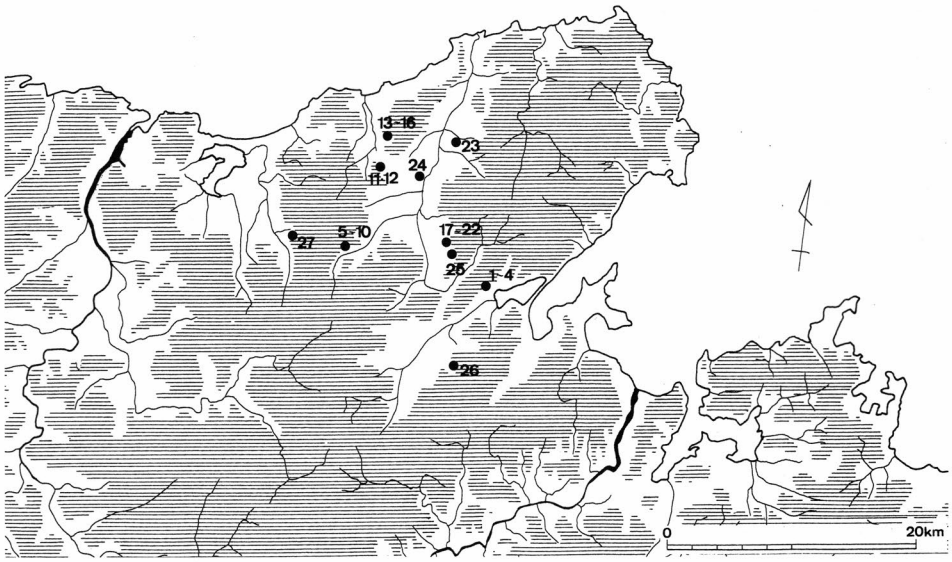
近年、丹後半島では豊富な副葬品を伴う弥生墳墓の調査が相次ぎ全国的にも注目を集めている。その中でも岩滝町大風呂南1号墓ではガラス釧・銅釧・玉類とともに11本にも及ぶ鉄剣が副葬されていたのは記憶に新しい。この主体部は墓壙内に「舟形木棺」を埋納したものとして資料が公表された。また、1999年には一辺40m近くの方形墳丘をもつ峰山町赤坂今井墳丘墓が調査され、中心には長軸14mを測る竪穴系の埋葬施設が確認され、周辺主体部からやはり「舟形木棺」が確認された。

これら、丹後で弥生墳墓の埋葬施設を中心に確認されている「舟形木棺」と呼称される刳抜式の木棺は、従来、丹後の弥生墳墓で採用されてきた箱形木棺とは明らかに異なる棺であり、同様の形態を示すものは古墳時代後期前半まで確認されている。しかしながら、この種の木棺については漠然と「舟形木棺」と呼称されてきたのみであり、十分に検討がなされていないのが実状である。本稿ではこの「舟形木棺」について様々な側面から検討を行い、その被葬者像などについて考えてみたい。なお、本稿では古墳時代、畿内を中心に確認されている「舟形木棺」と区別するため、丹後の「舟形木棺」を便宜的に「舟底状木棺」と呼称することとする。

2．舟底状木棺の復元と分類

丹後では現在までに12墳墓24主体から舟底状木棺が確認されている。概略は表に記すとおりである。可能性のあるものを含めると分布圏は久美浜町域から野田川流域に至る丹後半島全域で確認されている。

これらの事例のなかに棺材が細砂に置き換わって確認されているものが多く含まれている。木棺腐朽の過程において、脆弱化した木質部分に周辺埋土が土圧に押され木目内に入り込んでいくことにより木質部分が置き換わるものと判断される。また、地山のように安定した土壌に密着した場合では、一方からの土圧しか受けることがなく、木質部分がほとんど置き換わることがないものもある。ここではそのうちいくつかの事例を用いて木棺の



第１図　舟底状木棺検出墳墓分布図

１～24：表に同じ　25：三坂神社裏古墳群　26：入谷Ａ64号墳　27：南谷１・４号墳
（25～27は可能性の高いもの、未報告のもの）

復元を行いたい。

棺の平面形は両小口ともゆるやかな弧を描くものが多い。縦断面に関しても両小口部分とも弧を描いて立ち上がる。また、横断面形は側板が垂直には立ち上がらず円弧を描く。以上の点からみて刳抜式の木棺と考えることができる。棺の部材が複数で構成されていたことを示す資料は現在のところなく、一木から削り出されていた可能性が最も高い。棺の長幅比は第４図に示すとおり、やや幅広のものと狭長なものの２者が存在する。

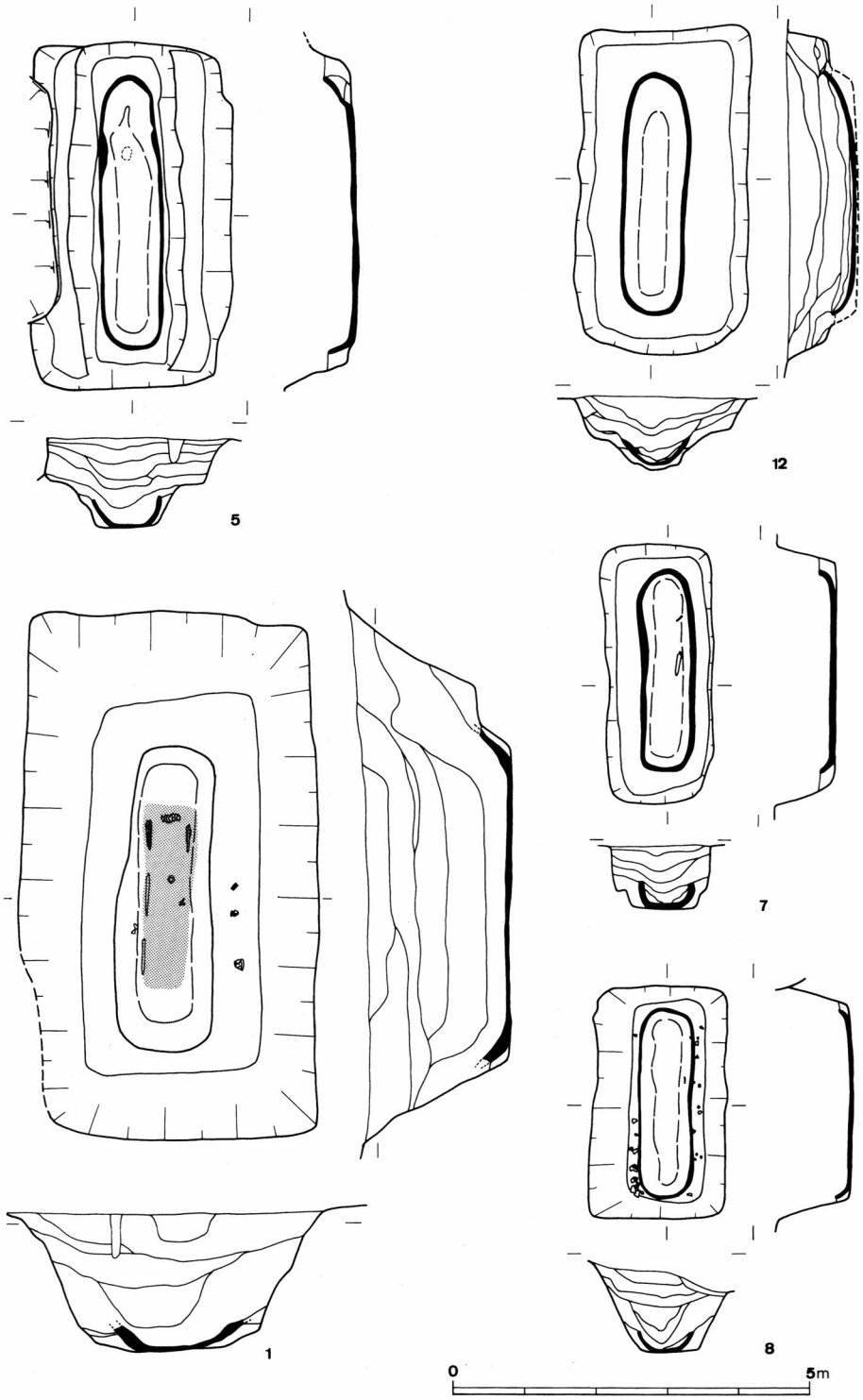
棺の平面形に着目するといくつかの形態が存在する。以下、諸例とその特徴を述べる。

金谷１号墓第１主体部・第６主体部では、一方の小口部分平面形が反対に比して鋭角をなし、両小口平面が非対称形を呈する。赤坂今井墳丘墓第２主体部で確認された木棺痕跡でも同様に一方が鋭角をなす。これを平面Ａ類とする。また、このタイプの木棺ではいずれも鋭角側を頭位に置くことから、明らかに頭位を意識して棺を制作したものと考える。

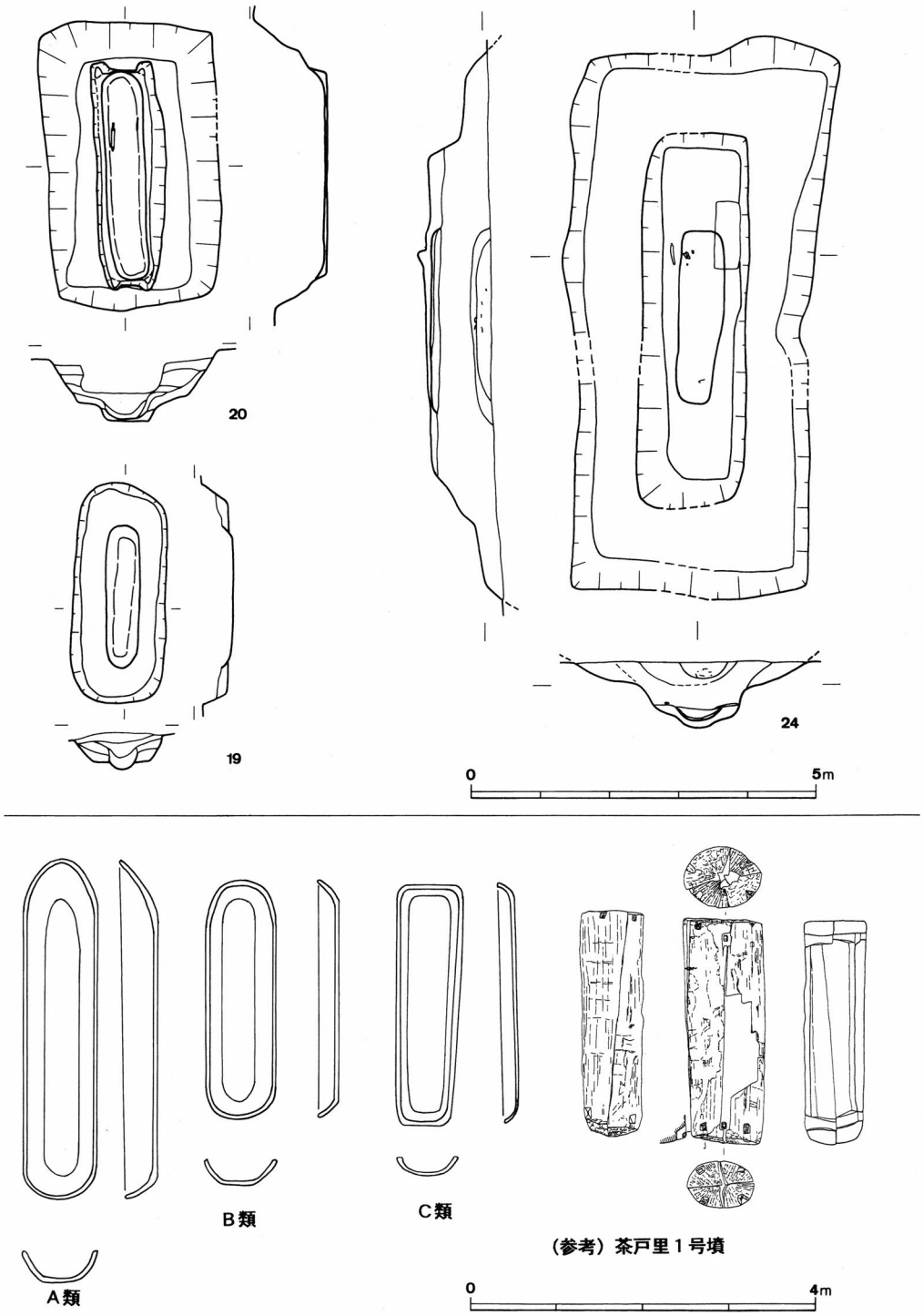
一方、金谷１号墓第12主体部や、浅後谷南墳墓第１主体部、大風呂南１号墓第１主体部のように両小口部分の平面形がほぼ同様の弧を描くものが存在し、このタイプのものが大多数を占める。これを平面Ｂ類とする。

そのほか、大田南２号墳のように小口平面形が隅丸方形状を呈するものがあるが縦・横断面形からみて、舟底状木棺のバリエーションと考える。これを平面Ｃ類とする。

横断面形では底面が水平に近く仕上げられているもの（１類）、ほぼ正円に近い形状をし



第２図　舟底状木棺の諸例（１）（各報告から再トレース、番号は表に同じ）



第３図　舟底状木棺の諸例(2)および復元図(各報告から再トレース、番号は表に同じ)

めすもの(２類)の２者が存在する。

以上のような形態を示す舟底状木棺であるが、その形状から丸木舟もしくは槽状の容器との類似点が指摘される。これら実際に、使用された木製品との比較はどうであろうか。

実物の丸木舟あるいは準構造舟との比較検討を行う上で、弥生時代の舟の資料が少なく、実体がきわめて不明瞭な点が問題となる。しかしながら、縄文時代の丸木舟の中には全長７ｍを越す例があること、舞鶴市浦入遺跡(注9)でも幅約１ｍ・残存長約５ｍを測る外洋舟と考えられる丸木舟が出土していることから、弥生時代においても舟底状木棺と類する規模の丸木舟が存在した可能性は極めて高い。また、仮に舟底状木棺を丸木舟の転用・模倣と考えた場合、清水潤三氏分類(注10)の丸木船の形状にたとえるならばＡ類は節操型、Ｂ類は鰹節型、Ｃ類は箱型にそれぞれ対応することとなる。

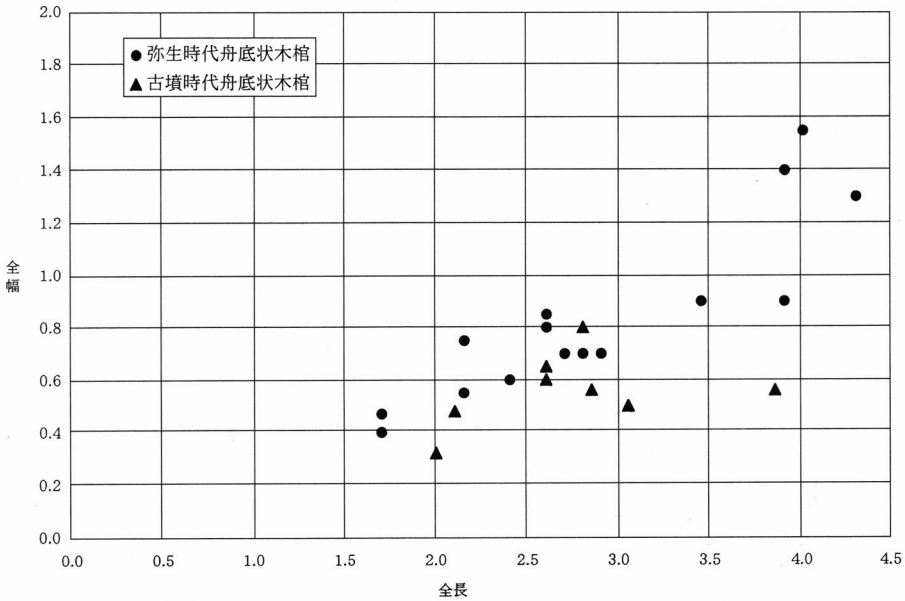
また、棺内の構造について興味深い事例がある。網野町浅後谷南墳墓第１主体部例では、棺底面にほぼ0.6ｍ×2.3ｍの範囲で長方形に朱が散布されていた。また、岩滝町大風呂南１号墓第１主体部でも副葬品の置かれている範囲、0.6ｍ×2.6ｍにほぼ長方形に朱が散布されている。これらの事例から考えると刳抜式の棺内には方形の区画が存在した可能性がある。棺内仕切り板の存在を考えることも可能だが、朱の塗布範囲外には副葬品が配されることがなく、ここでは丸木舟に削り出される横梁に近い構造物の可能性を考えたい。

一方、槽状の容器の転用・模倣と考えるにはその規模に問題が残る。丹後半島で確認される大形の槽状木製品は、古殿遺跡(注11)や浅後谷南遺跡(注12)例を見ても１ｍ前後と舟底状木棺の幅にさえ満たないし、小口部分を弧状に整形するものも少ない。この点から考えて、積極的に槽状木製品の転用・模倣と考えることはできない。

国内の弥生時代刳抜式木棺については吉留秀敏氏が北部九州を中心に諸例をまとめておられる(注13)が、いずれの例も小口部分を垂直に加工するものと考えられ、形態を異にしている。

国外の例として韓国慶尚南道義昌茶戸里遺跡(注14)は刳抜式の木棺を直葬する墳墓群として知られる。そのうち、１号墳から完形に近い刳抜式の木棺が出土している。同木棺は全長2.4ｍ・幅0.85ｍを測り、丸太を半截し、内面を刳り抜くことにより作り出される。平面的にはＡ類とＢ類の中間的な形態を呈しているが、一方の小口外形および内側の小口部分はほぼ、垂直に削り出される。断面は正円ではなく扁平な長楕円を呈する。また、底部もわずかに丸みを帯びている。断面形は１類に分類することが可能である。この棺は細部では相違点が多く、また、時期的にも開きがあるものの、刳り抜いて作られた棺が国内に先行して原三国時代に存在することを示す事例といえる。丹後の舟底状木棺との直接的な関係を示すことはできないものの、刳抜式木棺全般の出現を考える上で貴重な存在といえよう。

では、古墳時代に畿内を中心に出現する刳抜式の木棺と比較するとどうであろうか。小



第４図　舟底状木棺長幅比一覧(単位はｍ)

口縦断面形が垂直に立ち上がる割竹形木棺とは縦断面形において明らかに異なる。横断面形は半円形を示すものもあるが、底部が水平に作られる１類が弥生時代後期段階では多数を占める。また、滋賀県雪野山古墳(注15)など畿内および畿内周縁部で確認されている舟形木棺は正円で復元した場合、横断面形が竪穴式石槨内に収まらないのに対し、舟底状木棺は正円で復元した場合墓壙内に収まる。小口部分も舟形木棺が垂直に仕上げられるのに対し、舟底状木棺は弧状を呈する。縄掛突起などの確認された例は存在しないなど舟形木棺との相違点も多く、やはり異なる棺形式と認識することが可能である。

なお、棺蓋の構造については、木棺の腐朽過程で、まず最初に崩壊する部分であるため詳細は明確にはしがたい。しかしながら、赤坂今井墳丘墓第２主体部の縦断面土層を検討した結果、棺南小口上に棺中よりから棺小口に向け傾斜する粘質土が確認された。これは棺蓋小口部分の形状をある程度示しているものと判断され、おそらく棺蓋も身と同様に丸木舟状の形態を示しているものと推測される。

以上の諸点から舟底状木棺は丸木舟を転用、もしくは模倣して作られた刳抜式の木棺と考える。また、赤坂今井墳丘墓第８主体部のように全長1.6ｍと人体を埋葬する最小限の規模をもつ実用舟とは考えがたいものも存在していることから、基本的には丸木舟を模倣した棺であると判断される。

3．舟底状木棺の変遷

舟底状木棺を埋葬施設に採用する墳墓を時期別にみてみると、舟底状木棺は弥生時代後期後半に出現し、古墳時代後期まで採用され続けている。一方、A類舟底状木棺は弥生時代にのみ認められ、古墳時代にはB・C類舟底状木棺のみが採用される。簡略に時期をおって概観してみる。

弥生時代後期後半～後期末　舟底状木棺の出現・拡散期である。現在確認されるもっとも古い舟底状木棺は大風呂南1号墓第1主体部棺である。この段階に出現した舟底状木棺は後期末までに福田川流域から野田川流域まで広範に短期間のうちに拡散する。また、この段階でA～C類が出現していることから、祖形となる舟底状木棺の出現期はさらに遡る可能性がある。

こうした舟底状木棺は弥生時代後期において特定個人の棺として使用されたものではなく、金谷1号墓や浅後谷南墳墓の示すように1墳丘多埋葬をもつものでは箱型木棺と混在して検出される。この点からも舟底状木棺は特定集団によって採用された棺であるとみることが可能である。福永氏の指摘通り、棺形式は集団の出自を示しているものと考えることができる。[注16]

また、現在舟底状木棺が検出され、なおかつ全体像の判明する3基の弥生墳墓(大風呂南1号墓・金谷1号墓・浅後谷南墳墓)では中心主体に大型の舟底状木棺が採用され、墳墓築造の契機になった人物が埋葬されているものと判断される。

古墳時代前期前半　大田南2号墳棺の1例のみが確認される。同古墳は画文帯環状乳神獣鏡・鉄剣を副葬する。棺はC類舟底状木棺である。大田南2号墳は単独主体部をもつ個人墓であり、弥生社会から古墳社会への転換期に相当する時期に築造されている。この古墳は前方後円墳出現以前の首長墓と考えられる。注目されるのは画文帯環状乳神獣鏡である。この鏡は後漢鏡と考えられ、近接して、青龍五年銘鏡を出土した大田南5号墳[注17]が存在する点からも、舶載鏡を入手できる集団により造墓された古墳群の1基と見られる。

古墳時代前期後半　大宮町左坂古墳群B1号墳・B2号墳第1主体部が該当する。棺は両者ともB類舟底状木棺である。群小古墳の中核的古墳の棺として採用されている。また、同時期の三坂神社裏古墳群でもB類舟底状木棺が採用されているようである。この時期の舟底状木棺は弥生時代のものに比して、全体に狭長なものが主流となり横断面2類のものが大多数を占める。こうした状況は前方後円墳の築造と、それに伴う畿内割竹形木棺の出現と密接に連動して起こったものと考えたい。

古墳時代中期　奈具岡北1号墳第2主体部をあげることができる。B類舟底状木棺が採用されている。先行して造営された第1主体部は副室構造をもつ礫敷き箱形木棺であり、丹

後の中規模古墳に採用される埋葬施設である。第１主体部からは陶質土器・銅釧・武器類など多数の副葬品が確認されたが、第２主体部にはわずかに３点の鉄鏃が副葬されていたのみである。第１主体部に比して従属的な埋葬施設に採用されている点が注目される。

左坂Ｃ15号墳は群小古墳中の１古墳である。Ｂ類舟底状木棺を採用する。副葬品として鉄製農具とともに鍛冶滓が供献され、被葬者は鉄生産に関与した人物と見られる。

古墳時代後期前半　左坂Ｅ10号墳第２主体部をあげることができる。Ｂ類舟底状木棺が採用されている。現状で確認できるもっとも新しい段階の舟底状木棺である。群小古墳中の１基であり、やはり中心主体部ではない。

横穴式石室導入以降では棺の形態の明確なものはなく現段階ではどこまで舟底状木棺が採用されるかは不明である。

以上のように、舟底状木棺は弥生時代後期後半には出現し、弥生時代後期後半から後期末までは弥生墳丘墓の中心主体に採用される。前方後円墳の出現と前後して、舟底状木棺は首長墳の中心主体に採用されることはなくなり、群小古墳の主体部、もしくは大形墳の副次的埋葬施設に採用されるものと見られる。

４．舟底状木棺の被葬者像

先ほど検討したように、舟底状木棺は丸木舟を転用・模倣した木棺であると考えた。この点から、いわゆる舟葬墓に類するものとしてとらえることができるが、実際に転用棺として使用された可能性はあるものの、大部分は丸木舟を模倣した棺として制作されたものと判断した。

では、このような棺を採用したのはいったいどのような人々であったのであろうか。

弥生時代を通じて丹後では箱型木棺が採用され続けてきた。この点において舟底状木棺は従来の棺とは全く系譜を異にして出現する棺であり、既往の木棺に出自を求めることは困難である。

一方、辰巳和弘氏は古墳出土の舟関連遺物（舟形埴輪・埴輪線刻・古墳壁画・木棺）に着目し、古墳時代を通じて舟葬の観念があるものと解釈された[注18]。こうした思想的背景がどの時代まで遡るのか明確にはされていないものの、丹後に弥生時代後期の舟底状木棺が集中して検出されている点はこうした思想的背景を共通する集団が存在したことを伺わせる。

舟底状木棺の副葬品に着目してみるとその鉄剣の保有率の高さが注目される。大風呂南１号墓第１主体部では11本の鉄剣がまとめて検出され、金谷１号墓では舟底状木棺６基中鉄剣を副葬するもの２基に対し、箱型木棺では10基中２基と舟底状木棺の方が鉄剣の保有率が高い。浅後谷南墳墓では第１・第２主体部とも２本ずつの鉄剣を副葬し、やはり他の

主体部に比べ鉄剣の保有率が高い。このように見てみると弥生時代後期後半から丹後半島に鉄剣が多量に出土する背景に舟底状木棺の被葬者たちが深く関与しているものと推察される。丹後半島では弥生時代後期前半以降、鉄製品や玉類を副葬する墳墓が多数出現してくる。この背景には北部九州あるいは朝鮮半島・中国大陸との交流による鉄製品などの流通があったものと思われ、丹後半島にその中心となる集団が存在したものと考えられる。また、先述の3基の弥生墳丘墓では中心主体に舟底状木棺が採用されている点から見ても、舟底状木棺を採用する集団が、箱形木棺を採用する集団に対し優位にあったとみられる。

弥生時代を通じて丹後半島では箱形木棺が木棺の主流をなしていた。そうしたなか舟底状木棺の出現はあまりにも唐突であり、短期間のうちに波及していることを考えると、こうした人々を受容することが重要な点であったことが伺われる。

三坂神社墳墓群[注19]の示すように、弥生時代後期前半代には鉄あるいは玉類の流通に関与する集団が丹後半島に存在していたものと考えられるが、多量の鉄製武器を入手するにはいたらず、少量の鉄鏃や素環頭刀子・ヤリガンナなどを入手していたにすぎない。弥生後期後半代からの鉄剣を中心とした、多数の大形鉄製武器の入手は前代のシステムを踏襲・発展させる形で多量の鉄製品の搬入を行った結果であり、舟底状木棺の被葬者層はこうした鉄製品の流通の中核を担った人々ではないかと考える。舟底状木棺という新たな棺形式もこうした人々の移入に伴いもたらされたものではないだろうか。

5．まとめ

以上、近年検出例の増加しつつある舟底状木棺について私見を述べてきた。類似する木棺は丹後半島のみならず、いずれも古墳時代の例であるが、埼玉県稲荷山古墳[注20]・静岡県若王子19号墳・千葉県大寺山洞穴[注21]・兵庫県新宮東山2号墳[注22]・大阪府和泉黄金塚古墳東槨[注23]などに類例が知られる。また、佐賀県久里双水古墳[注24]の粘土床圧痕も丸木舟状を呈するものであり、形態的に類似するものと思われる。近年、奈良県下における前期前方後円墳の発掘調査を通じて、前期前方後円墳に採用される木棺は割竹形木棺以外に多様な木棺が採用されていることが指摘されている[注25]。今回、これら他地域の木棺について詳細に検討することはできなかったが、木棺形式をともにすることは何らかの共通する背景などを考慮しておく必要があろう。この点に関しては、古墳時代の木棺を今一度検討し、木棺の形式差がなにに由来するのか改めて考えていく必要がある。

舟底状木棺は古墳時代に採用される長大な割竹型木棺あるいは舟形木棺に先行して丹後に出現した巨大な棺である。弥生時代後期、丹後は鉄製品・玉類が集積、再配布されるターミナルとしての役割を担ったものと考えられている。このような地域は初期ヤマト政権に

表　舟底状木棺一覧表

No	墳墓名	主体部名	墓壙			木棺				遺物	時期	文献
			形態	長	幅	平面	断面	長	幅			
1	大風呂南１号墓	第１	２段	7.3	4.3	B	1	4.3	1.3	鉄剣11・ガラス釧１・銅釧13・貝釧１・玉類・ヤス状鉄器	弥生後期後葉	注1
2		第２	２段	4.1	2.7	A	1	2.15	0.75	鉄剣２・鉄鏃２・ヤリガンナ１		
3		第３	２段	4.2	3.8	C	1	2.9	0.7	鉄剣１・管玉		
4		第４	２段	3.7	2.1	B	1	1.7	0.4	管玉		
5	金谷１号墓	第１	２段	5	2.7	A	1	3.9	0.9	高杯・赤色顔料	弥生後期末	注2
6		第４	素堀	2.8	1.1	B	1	2.4	0.6	なし		
7		第６	２段	3.6	1.55	A	1	2.8	0.7	鉄剣・ヤリガンナ		
8		第12	素堀	3.3	1.9	B	1	2.7	0.7	甕・高杯・ヤリガンナ		
9		第13	２段	2.8	1.9	B	1	2.6	0.8	高杯		
10		第14	２段	2.7	1.5	B	1	2.7	0.7	鉄剣		
11	赤坂今井墳丘墓	第２	2段	4.5	2.4	A	1	3.45	0.9	ヤリガンナ１	弥生後期末	注3
12		第８	素堀	2	1	B	1	1.7	0.47	ヤリガンナ１		
13	浅後谷南墳墓	第１	２段	6.5	4.3	B	1	4	1.55	玉類・鉄剣２・土器	弥生後期末	注4
14		第２	２段	4.6	3.1	C	1	3.9	1.4	鉄剣２		
15		第３	２段	3.6	2	C	1	2.6	0.85	土器		
16		第８	２段	2.8	1.4	C	1	2.15	0.55	甕		
17	左坂Ｅ９号墳	第２	素堀	4	2	B	2	3.05	0.5	赤色顔料	古墳後期前半	注5
18	左坂Ｂ２号墳	第２	２段	4.4	1.6	B	1	3.85	0.56	赤色顔料	古墳前期後半	注6
19	左坂Ｃ17号墳		２段	3.2	1.4	B	2	2.1	0.48	なし	古墳中期後半	注5
20	左坂Ｂ１号墳		２段	4.2	2.5	B	2	2.85	0.56	ヤリガンナ・鉄剣	古墳前期後半	注6
21	左坂Ｃ15号墳		２段	1.2	2.6	B	2	2.6	0.6	鉄滓・鍬先・鉄斧	古墳中期後半	注5
22	左坂Ｂ７号墳		２段	1.5	2.84	B	2	2	0.32	鉄刀	古墳中期前半	注6
23	奈具岡北１号墳	第２	２段	4	1.8	B	１？	2.8	0.8	鉄鏃４	古墳中期前半	注7
24	太田南２号墳		２段	8	3.6	C	1	2.6	0.65	鏡・ヤリガンナ・鉄剣	古墳前期前半	注8

とって大きなプレッシャーとなったに相違ないが、その結果、武力による制圧、あるいは政治的連携などにより何らかの解決を図る必要性が生じよう。畿内との交流は浅後谷南遺跡や古殿遺跡出土土器が示すように、庄内併行期後半段階から活発になるようである。古

式の前方後円墳こそ未だ見つかっていないものの、もっとも古い前方後円墳である可能性をもつ湧田山1号墳(注26)は大田南古墳群を含めた矢田橋周辺の墳墓群の盟主墳である可能性をもつ。大田南5号墳の畿内庄内系高杯からみられるように畿内との積極的な交流を図った集団が矢田橋周辺の墳墓群を築いた可能性は高い。

前期後半代を中心に大形前方後円墳が築造される時期になると、丹後の墓制は確実に新しい段階を迎える。先述したように、舟底状木棺は大型古墳の中心主体部に採用されることなく、むしろ従属的・副次的な埋葬施設の棺として採用されるのみになる。新たに、大・中型古墳に採用される棺は、割竹型木棺・石棺・長大な箱形木棺である。これらの被葬者はいったいいかなる人物なのであろうか。従前から舟底状木棺を採用してきた首長層が新たに古墳時代の棺制を受け入れたのか、あるいは、外部から移入してきた人々が首長権を得たのか、この点については他の棺形式を含め、総合的に検討を進めていく必要があろう。

また、今回は舟底状木棺の被葬者に他地域からの移入者の可能性を考えたが、具体的にその出自などについて示すことはかなわなかった。中国には舟を棺槨に利用した舟葬墓が存在し、韓半島にも原三国時代の茶戸里1号墳のような刳抜式の木棺が存在している。国内での系譜が追えない現状ではこうした国外の諸例にも注意していく必要がある。今後、この点についてはさらに検討を加えたいと思う。

先述のように舟底状木棺は丸木舟もしくは準構造舟の下部構造を模倣して造り出された棺と考えてきた。丹後半島では鉄製品をはじめ、交易により入手されたと考えられる文物が多数出土する。また、舟底状木棺の鉄製品所有率は箱形木棺に比して群を抜いて高い。このような状況をみると、海上交通を主とした交易ルートを掌握した人々が黄泉への旅立ちに舟を意図した棺を用いたと考えるのもあながち滑稽ではなさそうである。

(いしざき・よしひさ＝当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1　白数真也・肥後弘幸・長谷川達・高田健一「大風呂南墳墓群」(『岩滝町文化財調査報告書』第15集　岩滝町教育委員会　2000)

注2　石崎善久・高橋あかね「金谷古墳群(1号墓)」(『京都府遺跡調査概報』第66冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1995)

注3　黒坪一樹ほか「赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳」(『京都府遺跡調査概報』第92冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　2000)

注4　竹原一彦「浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓」(『京都府遺跡調査概報』第84冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1989)

注5　石崎善久「左坂古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第60冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1994)

注６　石崎善久「左坂古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第89冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1999)

注７　河野一隆「奈具岡北古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第76冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1997)

注８　肥後弘幸「大田南古墳群　－大田南２・３号墳、矢田城跡発掘調査概要－」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第７集　弥栄町教育委員会　1991)

注９　石井清司・田代　弘「海上で用いられた丸木舟　－浦入遺跡群Ｒ地点出土の縄文時代前期の丸木舟－」(『京都府埋蔵文化財情報』70　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1998)

注10　清水潤三「日本古代の舟」(大林太良編『日本古代文化の探求　船』　社会思想社　1975)

注11　戸原和人・鍋田　勇「古殿遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第９冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1988)

注12　石崎善久・黒坪一樹「浅後谷南遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第93冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　2000)

注13　吉留秀敏「九州の割竹形木棺」(『古文化談叢』20　九州古文化研究会　1989)

注14　李健茂「義昌茶戸里遺跡発掘進展報告(１)」(『考古學誌』１　韓国考古美術研究所　1989)

注15　都出比呂志他『雪野山古墳の研究』(八日市市教育委員会　1996)

注16　福永伸哉「弥生時代の木棺簿と社会」(『考古学研究』32－１　考古学研究会　1985)

注17　横島勝則他「大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡　第２次～第５次発掘調査報告書」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第15集　弥栄町教育委員会　1998)

注18　辰巳和弘「舟葬再論」(森浩一・松藤和人編『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズ　同志社大学考古学シリーズ刊行会　1999)

注19　今田昇一・肥後弘幸「三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群」(『京都府大宮町文化財調査報告書』第14集　大宮町教育委員会　1998)

注20　斉藤　忠他『埼玉　稲荷山古墳』(埼玉県教育委員会　1980)

注21　千葉大学考古学研究室『大寺山洞穴第３・４次発掘調査概報』(千葉大学文学部考古学研究室　1995)

千葉大学考古学研究室『大寺山洞穴第５次発掘調査概報』(千葉大学文学部考古学研究室　1995)

注22　岸本道昭「新宮東山古墳群」(『龍野市文化財調査報告』５　龍野市教育委員会　1996)

注23　末永雅雄・森　浩一『増補　和泉黄金塚古墳』(日本考古学協会　東京堂出版　1954)

注24　唐津市教育委員会『久里双水古墳現地説明会資料』(唐津市教育委員会　1994)

注25　今尾文昭「木棺　－棺形態の二、三－」(『季刊考古学』52　雄山閣　1995)

注26　湧田山１号墳は墳丘測量の成果のみが報告され(『京都府の文化財』６　京都府教育委員会　1988)、築造時期などの詳細については不明であるが、墳丘の形態・築造方法などからみて古式の前方後円墳と見られる(広瀬和雄氏・佐藤晃一氏のご教示による)。